

アーザードのアブル・ファズル伝について(承前)

近 藤 治

はじめに

本誌に前稿を発表して以来、何人かの方々から貴重なご教示をいただいた。大東文化大学の片岡弘次教授からは、私が迂闊にも前稿執筆時に失念していた加賀谷寛教授編訳によるアブル・ライス・シッディーキーのウルドゥー文学史が存在することを指摘していただいた⁽¹⁾。確かにこの書は、近代ウルドゥー詩と近代ウルドゥー文学批評とを扱った二つの箇所では、アーザードの活動と作品を手際よく紹介している⁽²⁾。アーザードの生卒年については、この書では1832-1910年とする訳注が付されている(同書53ページ)。また加賀谷教授は、前稿でアーザードの作品の一つとして紹介した『ナイランゲ・ハヤール』(*Na'irang-e Khayāl*)は『ナイルンゲ・ハヤール』(*Nairang-e Khayāl*)であることを私信で教えていただいた。従ってその意味するところは「思想の新動向」ではなく、「思想の変遷」が正しいということになる。

大阪大学の松村耕光教授からは、アーザードに関する都合7編に上る最近の研究論文の別刷を恵送していただいた⁽³⁾。これらの専論によって、私はアーザードに関する新しい知見を数々教えていただいた。それらのうちここで記しておきたいことの一つは、アーザードの生年月日が1830年6月10日デリー生まれとされていることである⁽⁴⁾。その論拠となる出典は示されていないが、これはアーザードの出生に関する最も具体的な説ということになる。またアーザードの生年に関連して、それが実際には1830年であったにもかかわらず年金受給の関係で1835年とされてしまった、という記述のある文献も、別刷恵送に付された私信のなかで教えていただいた⁽⁵⁾。二つ目は、アーザードの著作集として3巻本のそれがラホールから刊行され

ている、ということである⁽⁶⁾。三つ目は、ウルドゥー語の形成に関し、アーザードはそれがムガル朝シャージャハーン時代のデリーにおいてブラジ・バーシャーの転化によってなされたとする見解をもっていたことが紹介されている点である⁽⁷⁾。松村教授の諸労作によって啓発を受けるところは、この他にも少なくないが、ここでは取りあえず上の3点を指摘するに止めておきたい。

アーザードの生年に関し、念のために新版『イスラーム百科』で調べてみると、そこでは1834年ごろデリー生まれの説を採っている⁽⁸⁾。かくして前稿で紹介した諸説と合せて整理してみると、アーザードの生年説としては1830年説、1831年説、1832年説、1833年説、1834年説、1835年説の都合6つの説が乱立している有様である。あるいはさらに別の主張が登場してくるかもしれない、という状況がまだ完全には終息していないかのようである。

以下は前稿に続くアーザードのアブル・ファズル伝の翻訳紹介である。本稿では底本テキストのページ数を、そのページ開始の訳文の冒頭部のところにパーレン()中ゴチックで記入して挿入することにした。また長い原注がある場合は、それが含まれているパラグラフの末尾に2字下げでこれを入れることにした。前稿では改行は原文に従う旨記していたが、本稿から原文のあまりに長いパラグラフは、改行によって差し障りのない場合、適当なところで分けて改行を施している。

アブル・ファズル、アクバル宮廷へ出仕

アクバルの帝国は次第に拡大していった。そして帝国は秩序とそのため
の統治法(qānūn-e intizām)を必要としていた。とりわけその理由は、古
い統治法を改訂しそれを普及させていくことが行政を担当しようとする者
に求められていたからである。しかも国をただ剣によってのみ拡大して
いくことは得策(466)ではないと考えられ、国内の人々と一体となって彼
らを支援していくことが求められていた。民族(qaum)も宗教(mazhab)も
慣習(rasm o rawāj)も、あらゆる事柄において対立があった。これに加え、

トルコ人は独自の民族であったけれども、彼らは狭い考え方をもち不寛容であって、こうした事業(人々と一体となって彼らを支援していくこと)には不向きであった。また彼らの強欲は先祖以来のものであって⁽⁹⁾、それによって人々の心は我慢ならぬほどうんざりしたものとなっていた。宮廷では宗教学者たち(ウラマー)と古い考え方をもった貴顕たちとが卓越していた。新しいことはさておき、何らかの良き時代到来の兆しは生ずるものである。そういう訳で人々はずまぬことに対しても〔好奇の〕目を輝かせていた。とはいえそうしたことは厭わしく不名誉なことであると考えられていた。国家建設を進める皇帝は〔こうした人々の関心を察知して〕立派な建物を建造し、これに四面会堂(Chār-iwān)と名づけた。そしてウラマーたちやスーフィー教団(ṭarīqat)の人々、貴顕たちやその他の人々の集団を選定して、夜に会合を開催した。そうすれば、恐らく適当な時期と事柄に応じて意見の一致が生じてくるであろうと期待されていたからである。こうした人々の間で、質疑応答と討論によって、そしてまた相互の羨望と嫉妬によって、互いに喧争が起こりはじめた。いかなる問題の局面も開けることはなかった。根本的真理とは何ぞや、といったことについて4人ずつ銘々がまさぐりながら演説と提案の火打石を打ち合わせていた。けれども根本的真理の火花は光らなかった。苛立ちと我慢が交差した。この間に、〔若い〕学者たちが〔新たに〕登場した。彼らは青春の情熱と名望、それに進歩への熱意を抱き、ほとんどすべての人々を論破した。さらに彼らはある種の暗示を示すこととなった。その暗示というのは、新しい頭脳によってこそ新しい考え方が生まれてくるのを期待することができる、というものであった。この若い学者たちの考え方について、うわさも広がりつつあった。そうしたうわさから彼らは水気をたっぷりと摂取した。彼らは水気を吸い取った魚であった。〔そのうちの〕兄の方(ファイジー)は、すでに宮廷に出仕していた。幸運は彼(アブル・ファズル)を宮廷の方へと磁石の引力によって引き寄せた。宮廷なる戦場には、彼に対して因習的で残忍な者どもの襲撃が待ち構えていたけれども、彼は死を賭してそれと取組み合いの闘いをした。彼は悪運の兆しを懸命に側へ押しやろうとした。宮廷において、ある機会が訪れた。ファイジーが何らかの折に上奏したのか、そ

れとも誰かを通して陳情があったのか、誰にも分らなかった。要するに、次から次へと希望の灯が点火されていったのである。彼が自ら『アクバル・ナーマ』に書いている如くである。こうして〔アブル・ファズルは〕自分の初期の思想を新しい色彩でもって描くこととなった。

ヒジュラ暦981年(1573年5月3日－1574年4月22日)、治世第19年のことであった。この年、この描写録(nigâr-nâma『アクバル・ナーマ』をさす)の描き手(naqsh-band)アブル・ファズルは至高の宮廷において頭を垂れて官位の階きざしに昇った。彼は孤独の世界の胎内から抜け出して、5年のうちに〔宮廷の〕礼儀作法を身につけた。彼の外見と中身(şurat o ma'nâ)について、父(シャイフ・ムバーラク)は教育の観点から振り返ってみた。15年の歳月の間(5歳から20歳まで父のもとで教育を受けた間)に、彼は哲学の諸分野並びに伝承されてきた諸種の知識にはよく通じるようになった。彼は学問の扉を開き、また哲学の王宮において謁見を許された。けれども幸運が有する非情さ(be-yâri)の故に、自惚れと傲慢に陥った。何日間かの賑わいと人混み(有名になって人気が出ること)の生ずるように努めていた。〔アブル・ファズルが教師となって〕学生たちが押し寄せてくるようになると、彼の自省の元手(sar-mâya 要因)は非常に膨らんだ。彼の仲間たちは礼節も公正さも弁えない一派と見なされた。このため〔アブル・ファズルの心奥に〕ただ一人となって漂泊の旅人(gharīb al-waṭan)になってみてはどうか、という思いが浮んだ。学者たちには、外見上の追従を模倣的に行なう人々と、表面だけを見て異論を挟む人々とが流行していた。私(アブル・ファズル)⁽¹⁰⁾は、驚きの小路(467)のただなかでびっくりして立ち止まり、〔こうした動向を〕眺めていた。黙っていることができなかった。しかし言葉を発する力とてなかった。尊父(シャイフ・ムバーラク)の忠告は、悪霊(jinn)どもの徘徊する荒野のなかでは効力を発揮できなかった。しかしながら心の悩みの完璧な治療は存在しなかった。〔アブル・ファズルは〕あるときは中国辺境(khiṭṭa-e Khaṭā)の賢者たちの方に心を引かれ、あるときはレバノン山(Küh-e Lubnān)の聖者(murtāz)たちの方に身をかがめた。またあるときはチベット(Tibbat)のラマ教徒たち(Lāma log)のために五体投地し(taraptā)、あるときはポルトガルの神父たち(pādiriān-e

Portugal)との親交を深めようかと思った。さらにまた、いつかペルシアの拝火教司祭たち(mūbadān)ならびにザンド書(Zhand ゴロアスター經典アヴェスター)とその注釈書(Astā)の奥義精通者たち(rumūzdān)のなかに座して、揺らぐ炎を消し去ろうかとも思った。なぜなら、[アブル・ファズルは] 小賢しい者どもや重臣たちのいずれに対しても、心は飽き飽きしていたからである。

以上のような魅力的な陳述は、[アブル・ファズルが] いずこかににおいて自分の状態について述べたものである。しかし陳述は新たな色調を帯びて、幻想の世界を生み出している。私奴アーザードは、アブル・ファズルに大いに驚嘆している(mutaḥiyyar)。すべての事柄を書き記すことはできないが、さりとて書かずに残しておくこともできない。

我がシャイフ・アブル・ファズルが述べているところは、要するに次の如くである。すなわち、運が向いてきて皇帝の御前で学問と神の加護が採択された。彼は宮廷から召喚を受けた。だが彼の心は〔それに応ずることを〕望んでいなかった。親愛な兄弟や情深い友人たちは異口同音に、形相(ṣūrat)と質料(ma'nā)の〔双方を体現した〕皇帝の宮廷である故、必ず出仕すべきであると唱えた。ここにおいて、彼は心中のわだかまりの鎖をすっかり断ち切った。神のような方(Khudā-e majāzi)〔尊父〕が帳を開き、次のように諭してやった。幸運の玉座にお即きの方[アクバル]の真実の極致について汝は何も知っていないが、この方は〔その一身において〕宗教と現世の両海が相会しており、形相と質料双方にとって東方の光である。汝の心に生じた難問は、〔宮廷に出仕すれば〕そこで解けることになろう、と。〔尊父は〕この人(アブル・ファズル)の幸せを自分の喜びよりも優先するものと思っていた。世界中の富が溢れて宝庫番は暇であった。彼(アブル・ファズル)は〔クルアーンの〕玉座の節(āya al-kursi)⁽¹¹⁾の注釈を書いた。皇帝はアーグラに來られており、[アブル・ファズルの] 平身低頭礼(kornish 皇帝謁見の際の作法)の祝福を受けられた。件の注釈の各葉は、〔一家の生活の〕困窮ぶりを示していた。だがそれは嘉納されて〔宮廷出仕が〕承認された。彼は靈藥(ikṣir)の助けを受けて心の苦悶が癒されていくのが分った。そして神聖な人(皇帝)の慈愛が彼の心を捉えてしまっ

た。〔皇帝親征の〕ベンガル遠征が控えていた。この王国を征服するため、無名の隠者(アブル・ファズル)の事柄には関心を払うことなく皇帝は出陣し、彼の方は〔随行せずアーグラに〕止まった。

ベンガルから送られてくる兄(ファイジー)の書簡には、皇帝が汝のことを覚し召されている、と書かれてあった。アブル・ファズルは〔クルアーンの〕勝利の章^(原注1)(第48章)の注釈を書き始めた。皇帝がパトナを征服して帰還し次いでアジュメールに赴くと、そこでもまた〔アブル・ファズルのことを〕覚えている旨述べたことが伝えられてきた。幸運の印(皇帝)がファテブルに帰還すると、〔アブル・ファズルは〕尊父の許しをえてその都に赴いた。彼は兄のところに投宿し、次の日に皇帝の築いた金曜モスクへ行って伺候した。皇帝が現われると、アブル・ファズルは離れて平身低頭礼を行ない、〔皇帝から出る〕光を収めた。皇帝の叡知はその洞察力でもって〔アブル・ファズルを〕見抜き、身近かに呼び寄せたのであった。〔皇帝の眼には〕時代と時代の子たちの状態が次第に明らかとなった。しかも目尺(palla)は遠くまで伸びていた。放っておけ、誰か同名異人の者が呼ばれているのかもしれない。だが、自分自身の運が(468)開けてきたことがはっきりすると、アブル・ファズルは駆け出して行った。そして〔金曜モスクの〕壮麗な入場門に額を押しつけた。かの宗教と現世とを合わせ続ける方(アクバル)は、かなり長い間彼と問答を続けた。勝利の章の注釈について、彼は詳しく説明した。神への願かけ(nazr)は叶えられた。彼が知らないうちに、皇帝は神聖な饗宴に集まった貴顕たちとアブル・ファズルの様子について話し合った。このときも、2年間にわたって彼の性格が災いし、心中の狂気(junūn)が孤独の方へと引っ張っていた。しかしながら、彼の魂の首に何筋かの投げ縄が降りかかってきた。恩寵は日増しに増大していった。取るに足らぬ存在から一個の貴重品に変えられてしまった。訓練の程度は徐々に高められていった。ついに意中のエルサレム(聖域すなわち宮中)の鍵が手に入れられた。

(原注1)老師(シャイフ・ムバーラク)とその若者たち(ファイジーとアブル・ファズルたち)の試みについては、いくつかの趣向が込められていたことに注目する必要がある。当初、都(アーグラ)において伺候

したときには、玉座の節の注釈を献上した。玉座の節は除災のために詠まれたものであるという点が、この注釈の献上には込められていた。皇帝は〔ベンガルに〕親征し、神の加護に恵まれた。アブル・ファズルはファテプルにおいて勝利の章の注釈を献上した。これには勝利を祝福する意が込められていた。そしてまた、これは東方における勝利の序章でもあった。

要するに、アブル・ファズルが宮廷に出仕するようになると、彼は気質学(mizāj-shināsī)や伺候作法(adab-e khidmat)〔の修得〕、勅命への心服、知識と才能、機知と厳粛によってアクバルの心を捉えてしまったのである。その結果、アクバルの話し相手はいつもこれら2人の兄弟であるというほどまでになった。マフドゥームル・ムルクと司法長官(シャイフ・アブドゥンナビー)の家には悲歎が襲った。神もそっぽを向いた。というのは、彼らはシャイフ・ムバーラクの学識と教養を押さえつけることができるとすれば、ただ宮廷の権力を頼むことによってのみ可能だったからである。彼らには今やこの分野も失われてしまった。数日ならずして、ムバーラクの若い2人の息子たちが宮廷に到来し、国家の枢要任務に参画しはじめた。

アブル・ファズルの叙述のスタイルもまた一つの快哉を呈している。彼が上に述べたような事柄をいかなる感興をもって叙しているか、少し見てみよう。皇帝はアジュメールから帰還すると、ヒジュラ暦982年(1574年4月23日－1575年4月11日)はファテプルの地に止まっていた。この年、ハーナカー(khānaqāh)⁽¹²⁾の近くに、皇帝は信仰の館('Ibādat-khāna)を設けた。この館は四イーワーン(iwān)形式によって構成されていた。その説明は非常に長いものとなる。誰かがもっと詳しく書き記すこととなろう。この当時、シャイフ・アブル・ファズルはシャイフ・ムバーラク・ナーゴリー(ナーゴリーの孝行息子で、アッラーミー('allāmī 大学者)と称され、世の中に知性('aql)と見識(dānish)の名声を轟かせていた。早暁に信仰の灯りを輝かせ、自ら朝日のなかで灯をともした⁽¹³⁾。アラブの格言「敵対から融和へ」は、対立から融和が生まれてくることを述べたものであるが、それは全ての宗教的対立を〔各人〕自らの責任であるとする考えに基づいている。これを試金石として融和の遂行を決意する。要するに、アブル・ファズルは

宮廷に出仕して皇帝のもとに仕えることを自分の本務とするようになったのである。〔クルアーンの〕玉座の節の注釈は、アクバルに捧げられた彼の治世史の解説であった。この注釈には、クルアーンに関する多くの微妙な論点が込められていた。これは彼の父の著したものであった、と人々はいう。皇帝は独善的な学者たち(mullāyān)を懲らしめるため〔私にはそのように受取れるのだが〕、アブル・ファズルの意思を存分に受け入れた。

それからはシャイフ・ムバーラクとその息子たちの上に降りかかっていた災厄が、マフドゥームル・ムルクと司法長官の側に移った。それについては学者たちが何行かを費して書きつらねている。今やシャイフ・ムバーラクたちの盛時となった。皇帝の庇護と権力を笠に着てご都合主義と不誠実とご機嫌伺いと際限のない追従によって(469)陰口を叩き、不当な張り合いを演じていた連中どもに対して、アブル・ファズルは敢然と恥辱を加え、彼らの旧式ドームを土台から掘り起こし、これを放擲してしまった。それのみならず、すべての信者たち(bandagān-e khudā)や長老たち(mashā'ikh)、イスラーム学者たち、禁欲主義者('ābid)や敬虔主義者たち(ṣulahā)、孤児や貧者たちの年金(waṣīfa)や恩賞地(madad-e ma'āsh)が削減される原因は、かの連中どもにこそあった。これ以前は、言葉と態度双方が〔そのことを〕常に伝えていた。四行詩(rubā'ī)。

おお神よ、世人に論拠(dalili 証人)を送り賜え
ファラオ(Fir'aun)に^{およ}舘のような属性の象を送り賜え
ファラオとその輩たちは獲物を得んと手を上げている
モーセと杖、そしてナイル川を送り賜え⁽¹⁴⁾

この人々(マフドゥームル・ムルクや司法長官たち)の上に騒動が起こり始めると、しばしば次のような四行詩がアブル・ファズルの口にのぼった。四行詩。

火炎は我が手で己が乾草に付けしもの
我が身が火付けをせしゆえに、己が敵をどうして怨もうぞ
我が敵は誰だろう、我こそ己が敵
悲しいかな、我と我が手と我が裳裾よ⁽¹⁵⁾

議論の最中にもし誰かが立法行為者(mujtahid)の言説を引き合いに出

そうものなら、〔アブル・ファズルは〕よく次のようにいうことがあった。ハルワー (ḥalwā 砂糖菓子) 作りや靴屋、革職人のような人が口にした言葉を論拠として反論するのか、と⁽¹⁶⁾。つまり、彼はすべてのシャイフ (shaikh 宗教的指導者) やウラマーの否認に快哉を抱いていたのだ。アーザードに言わせれば、〔アブル・ファズルの〕彼らに対する矜持は、とりわけムッラーに対して強かったというのではなく、すべての学問分野とあらゆる年代の人々に対して向けられていた。大長老やお偉方の宮廷大官たちはあがき、かつまた我慢していた。

もし私たちが君主の気質学を学びたいと欲するならば、次の一点を学べば十分である。すなわち、アブル・ファズルと既述の学者たちが前後して宮廷に到着したとき、皇帝はどの学者に対しても観察の眼を十分に注いでいた、という点である。皇帝は学者たちに対して二十位 (bistī) の官位を与え、また閩馬烙印 (dāgh) を受けるための費用の金も与えた。しかし彼らはそれを受け入れなかった。アブル・ファズルもまたモスクに隠棲した一学者の息子であったが、彼の方はモスクから抜け出して宮廷に伺候し、たちどころに〔官位と下賜金を〕拝領した。そして彼が宮廷勤仕の命を受けてこれを実行に移すと、状況は一変した。哀れな学者たちのなかで、彼は第一の学者となったのだ。〔他の学者たちがどんな気持ちでこの災厄の悲哀を嘆いたか、ちょっとでも思い浮かべてみるとよい。〕

アブル・ファズルは名文家 (inshā-pardāzī) の帝王であった。アクバルもまた、アブル・ファズルの頭脳がその両手よりもはるかによく闘うであろうこと、だがその手にもった筆は剣よりも一層よく切りつけるであろうことを見抜いていた。この故に文書局 (dār al-inshā') の勤務を彼に任せることにした。また国家の枢要事項を記す歴史もまた彼の統轄のもとにおかれた。このほか彼は〔皇帝が下す〕すべての命令 (ḥukm) を細心の注意と苦心を払って書き上げた。こうして彼は次第に皇帝の心中に大きな信用と信頼を築いていった。そしてあらゆる種類の相談と協議において、彼の意見は欠かせぬものとなった。その結果、〔皇帝に〕腹痛が生じると医者さえもアブル・ファズルの意見を確かめるまでとなった。また吹き出物に膏薬がはられていると、彼の提案も処方に加えられることとなった。アブル・

ファズルは、今や学者としての職責の小路を馬に乗って駆け抜け、高等官の貴顕たちがいる広場に旗を打ち立てたのであった。

(470) ヒジュラ暦993年(1584年12月24日－1585年12月12日)の〔年初の〕慶祝について、アブル・ファズルは次のように書いている。高等官の貴顕となった誰それに、あれこれの勤仕の褒賞としてこれこれの官位が授与された、と。大著『アクバル・ナーマ』の著者(アブル・ファズル)のために、何か特定の勤仕によって推薦されたというのではなかったけれども、皇帝から官位千位を授与された。彼は立派な勤仕を重ねていくことによって幸運の顔を輝かすものと期待された。

ヒジュラ暦997年(1588年11月10日－1589年10月30日)、アブル・ファズルは皇帝に付き従ってラホールに滞在していた。彼の母親が他界した。彼は深い悲しみに包まれた。悲嘆の様子は、次の事柄から思い浮かべることができる。彼は落ち着きをなくして、ウルフィー⁽¹⁷⁾が自分の母を亡くしたときに詠んだ次の詩句を吟じていたのだった。

阿母の慈愛でミルクは血となりし

昇天されても御影はなお臉に浮ぶ

彼自身も書き残している。今では『幸運の書』(Iqbāl-nāma)⁽¹⁸⁾の搜絵のなかに、やや気落ちして哀れにも悲嘆に沈んでいる〔彼が描かれている〕。王家の出身で貴婦人の家系に属す、貞淑な慈悲心に満ちた母が、このはかない世から天国に旅立った、との知らせが届いた時のものである⁽¹⁹⁾。対句。

我が母君が地下に眠っておられるように

たとえこの身が土をかぶろうと何を恐れよう

知っている、この^{いや}弥増す嘆きの歌は

あなたが往かれた先祖たちのところから届いてくることを

だが我が身の堪えなさを何としよう

あれこれの言い抜けでこの身を欺かんとすることを⁽²⁰⁾

悲嘆慰撫者たる皇帝(Shahryār-e ghamgīn nawāz アクバル)がやってきてアブル・ファズルを慰藉した。そして哀悼のことばのなかで次のように語った。もし世界中の人々が忍耐の重荷を荷ない、そのうちの一人だけが消滅後の世界に往くとしたならば、それでもなおその人物の友人たちに

は、彼に同意と承認を与える以外に仕方がないことであろう。この隊商宿(kārwānsarā 現世の比喻)にある程度は長らく止まろうとしないならば、辛抱が足りないという非難をどう考えたらよいのか考えてみよ、と⁽²¹⁾。この心和ませる言葉を聞いて、アブル・ファズルは気持ちがしっかりしてきた。そして適切な機会がやってくると、彼はそのなかに没頭した。

ヒジュラ暦999年(1590年10月20日－1591年10月8日)に、アブル・ファズルは次のように書いている。今日、息子のアブドゥルラフマーン('Abd al-Raḥmān)の家では明るい星が輝きを増した。様々な喜びの騒ぎが起った。世界主(gīṭī khudāwand アクバル)は[新生児に]ピショータン(Pishotan)⁽²²⁾と名づけた。望むらくは、幸運と勝ち運に恵まれ、そしてまた長寿に相応しい絆に恵まれんことを。

この年にアブル・ファズルは次のようにも述べている。皇子サリーム[ジャハーンギール]の年少の息子フスラウのクルアーン読誦の謁見式(bi'smi'llāhi kā darbār)があった。はじめに融和を進める(wahdat-bakhsh)皇帝が殿中で恭しく[この儀式を]取り行なった。そして[クルアーンの]初学的素読(kahā-kaho-e alif)があり、次いで皇帝が[「フスラウが」毎日やや長く机に向かって学ぶように取り計れ]との命令を下された。皇帝は数日後、[アブル・ファズルの]弟のシャイフ・アブル・ハイル(Shaikh Abu'l-Khair)にその任を委ねられた。

ヒジュラ暦1000年(1591年10月9日－1592年9月27日)にアブル・ファズルは次のように述べている。『幸運の書』(既出)の著者に官位二千位が授けられた。願わくば勤仕の履行を我が言の葉によって果たして報恩の真情を表示し、かつまた陛下の高雅の識別力(johar-shināsi)が近きにも遠きにも及ばんことを。

ヒジュラ暦1004年西暦1595年に、アブル・ファズルが[兄]ファイジーの著作類を読んでいたところ、困惑を覚えたところがいくつかあった。兄が有する内奥の一端がこれほどまで明らかにさらけ出されていたことはなかった。そこでアブル・ファズルはそれらの著作類の編纂に注意を注いだ。ヒジュラ暦1006年西暦1596－1597年(正確には1597年8月4日-1598年7月24日)に、彼はそれらの編纂を済ませた。(471) 2年間がその仕事に費

された。この間に彼は官位二千五百位の官職に叙された。かくして、高等官たちの一覧を載せている『アクバル会典』のなかに彼自身の官位も記されることとなる。

アブル・ファズルは実に思慮深く分別のある人物であった。しかも、アクバルを除いて宮廷全体のなかに一人として彼自身を心底から信用してくれる人はいないことを知っていた。彼は非常に純粋な教化を受けていた。〔父〕シャイフ・ムバーラクがクルアーンの注釈を行っていたからである。ムバーラクはこのクルアーン注釈の写しを何部か用意した。そしてそれらをイランやトゥーラーン、オスマン帝国(mulke-rûm)その他に送っていた。〔アブル・ファズルに〕敵意を抱く者たちは、いつも待ち伏せして待機していた。彼は誰も知らない人物に託して、このことをアクバルのもとに次のように伝えていた。「私は不愉快な目に合いました。陰口を叩く者たちのことを耳にした者がおります」と。皇帝が言うには、「一体どうして涙を流しているのかね」と。それに対してアブル・ファズルは多分こう言ったであろう。「陛下の御前では、こうした人々はイスラーム教の信奉者であるといえます。しかし一方ではタクリド(taqīd 法典等の学問的解釈への随順)の弊害や、宗教論書(dīniyāt)の間違いを明らかに公言します。また他方でクルアーン注釈者(mufasssīr)に対しては心底信をおいております」。あるいはこう言ったかもしれない。「陛下に申し上げます。私奴は陛下の他に誰も存じ上げておりませんが、陛下こそイスラーム法の護持者であり国家の守護者であると確信しております」。あるいはまた、こっそりこう言ったかもしれない。「うわさのクルアーン解釈(tafsīr)では説教(khuṭba)のなかに陛下の御名が込められてはいません⁽²³⁾。恐らく件の皇族たちの宮殿において、方策が見つげ出されることでしょう」。要するに、彼の口にしたことは皇帝の心証を悪くした。さる歴史書には次のように書かれている。ジャハーンギール(当時は皇子サリーム)はこの件に関し、アブル・ファズルは甘言の極めて上手な人物であると〔皇帝に〕伝えた。アブル・ファズルは非常に困惑している様子であった。まるで悲嘆にくれて服喪中であるかのように。戸外に出ずに消沈していた。彼は宮廷に出仕するのを取りやめてしまった。人と交わることもやめ、見知らぬ人の来訪を

禁じてしまった。皇帝に彼のこうした様子が伝えられた。このため皇帝はたちどころに対応に取りかかり、伺候して自ら勤めを引き受けるようにとの命令が伝達された。この間、安否を尋ねる伝言が〔アブル・ファズルのもとに〕多く届いた。ようやくにして、アブル・ファズルは自ら次のように記すに至った。「私は心知(āgāh-e dili)の道に立ち止まり、先見の明の理解力が不足しているとして皇帝が非難されていると思った。理解力がなければ暗黒である。こういうことは敵対者たちの願望を叶えてやることになる。〔事態が〕別の方向に動き出したのは、どういう思惑によるのであろうか。〔皇帝の〕尋常ならぬ公正な計らいが、予期せぬ動きを引き起こすことになる」と、等々。詰まるところ、皇帝が再度招喚すると、アブル・ファズルは〔心中に描いていた〕当初の図案を消し去って宮殿に登朝した。そして様々な恩寵を賜り、悲嘆から解放されていった。

ヒジュラ暦1005年(1596年8月15日－1597年8月3日)に次のように書いている。カシュミールへ行ってさるラジュール(rajūr)⁽²⁴⁾のもとに滞在した。皇子サリーム[ジャハーンギール]は皇帝の同意なしに仕候した。その途中、彼は多少の過失を仕出かしていた。[こういうことはしばしば起こっていた]。数日間、彼は平身低頭礼を禁じられ、譴責を受けて礼節館(adab-gāh 実際はテント造り)に止め置かれた。[下がって我慢してテント住まいをしておれ、の意]。この審判には、実際のところアブル・ファズルも加わっていた。皇子の不名誉が曝し出されることによって、アブル・ファズルの過失は見過ごされることになった。

次のように明言することができる。すなわち、アブル・ファズルはアクバルの寵児(maṣāḥib)であり、助言者(mashwara-kār)であり、腹心(ṣāḥib-e i'tibār)であり、右筆頭(mir-munshi)であり、書記官(waqā'i-nigār)であり、立法策定者(wāzi'-qawānīn)であり、(472)登録官(ṣāḥib-e diwān)であり、さらにアクバルの舌(zabān 口)、否それどころかアクバルの知恵の鍵('aql kī kunjī)であった。あるいはアレキサンドロス(Sikandar)に対するアリストテレス(Arašṭū)であった、というべきであろう。また有弁の士たちは次のように語るかもしれない。すなわち、アブル・ファズルはこうした高い地位に相応しい才能を有しているかどうか尋ねられようもの

なら、彼の才能に相応しい地位の方が実際の地位よりもはるかに高いという声がどこからともなく起こってくるであろう、と。アクバルの命ずる諸々の命令の発令方式(ṭarz-e bayān)、並びに貴顕たちの行動の改善および彼らの払うべき努めに対し常に警告を発していくことも、アブル・ファズルの気の抜けぬ仕事であった。口さがない者はきつと次のように言うであろうし、また事情を解さぬ者もいまだに次のように思っていることであろう。すなわち、彼はアクバルのもとに近侍し、事案についてあれこれおしゃべりしているのだ。実際に戦場において危急存亡のときに軍務を完遂することは、また別のことがらである。もし彼自身が戦場に身をおくことになれば、彼はあちこち至るところで様々な困難に遭遇することになるであろう、と。全くその通りである。しかしながら次のことも疑いのないところである。すなわち、これらの困難が不可抗力的に彼の頭上に突然降りかかってきたとき、彼はこの上なく男らしく喜び勇んだ様子でその困難を引き受け、周りの人々を仰天させてしまったのだ。モスク守りの学者の息子が帝国の重責を背負っていくこととなり、しかも何とも見事にやってのけるのである。彼の精通ぶりを示すいくつかの見本を簡潔に紹介することにしよう。

ヒジュラ暦1006年(1597年8月4日-1598年7月24日)になると、アブル・ファズルの昇進の仕方は速度を増した。デカン地方の状況は非常に面倒なことになってきた。この重要任務をアクバルは皇子ムラード(Murād 第2皇子、この語には「願望」の意がある)の名に因んで、この皇子に委ねた。そして多くの歴戦の将軍と著名な指揮官に軍隊を率いて同伴させた。皇子はまだ年若い青年であった。実践を積んだ将軍たちと同じように前進していくことは、この皇子の任務ではなかった。彼にはある交渉に係わる任務があった。皇子は〔交渉において〕2度拒否されて、その努力は無に帰していた。最大の難問は、皇子が酒の悪癖に溺れていることであった。皇子は実に深刻な状態になっていた。このため、軍事行動には一層混乱が生じていた。こうした知らせが相次いで宮廷に届くと、アクバルは非常に気をもむようになった。アブル・ファズルを手元から離すことは何とも耐え難いことではあったが、彼を宮廷から送り出すこと以外に術はなかった。

当時アクバルは皇軍を率い5年間にわたってパンジャブ地方を巡回中

で、ラホールに滞在していた。その結果、事態は改善されていた。なぜなら〔ムガル軍は〕カシュミールで勝利し、ユースフザイー (Yūsufza'ī)⁽²⁵⁾ その他の勢力を国境地帯に追い払うという難業を存分に遂行したからである。アブドゥッラー・ハーン・ウズベク ('Abd Allāh Khān Uzbek)⁽²⁶⁾ の引き起こした割け目は塞がりをはじめていた。そしてこの国盗りの帝王は、ヒジュラ暦1005年に邪悪な息子の悪行によって追放される身となった。彼の国の秩序は混乱した。この時ほど、アクバルにとって故国(mul-k-e maurūṣī)を奪い取るのによい機会はなかった。しかしながらブルハーン・ムルク(Burhān al-Mulk アフマドナガル王国のニザーム・シャーヒー朝第7代王、在位1591-95)の王国が衰退していたために、デカンの料理もまた目の前に用意されることとなった。長期間にわたって将軍や軍隊の移動が続いた。ムラードの状態から見て、デカンの兵士たちが軍司令官たるムラードの指揮から解かれることを望んでいることは、アクバルには明らかであった。アクバルは2人の皇子(サリームとダーニヤール)を呼び寄せた。彼の考えは、皇子サリームに軍隊を率いてトルキスタン遠征に向かわすことであった。かの酒と肉に溺れていた皇子ムラードは泥酔状態が続いていた。〔3番目の〕皇子ダーニヤールが(473) イラーハーバードから〔デカンに向かって〕前進している、との知らせが届いた。しかし彼の意図していることが〔戦術上〕適切でないことは明らかであった。やむなくアクバルは自らラホールを後にし、ダーニヤールを引き連れてアフマドナガルへと向かい、そしてデカン地方にけりをつけた後に、トルキスタン遠征に取りかかろう、と考えた。

アクバルはアブル・ファズルの善意と知性、並びに思慮深さに並々ならぬ信頼をおいていたので、彼が言ったことを自分自身が口にしたことのように受け止めていた。アブル・ファズルが誰かと約束した事柄を、アクバルは自分の口を通してなした約束のように解していた。そうしたことの裏付けは、アブル・ファズルが皇子ダーニヤール宛に認めた上奏文に見られる次のような表現によって得ることができる。(以下このパラグラフの末尾までの引用文はペルシア語の文章)「アブル・ファズル殿よ!と、欽定暦ムルダード月(Murdād-e ilāhī ペルシア暦の5月)8日、神の影たる皇帝

は夜のしじまのなかの浴室で、このような幸先のよい言葉⁽²⁷⁾で独り言をなさいました。アブル・ファズルよ！余が検討してみたところ、デカン遠征は汝かそれとも余によってなされるべきであると考えに至った。さもなくば事態は終結を見ないだろうし、許容できるものとはならないであろう。もし汝がいうように皇子(ムラード)が〔病気で〕引き籠もったままであるということに確信があるのならば、汝は別の便法に訴えるようなことはせず、また非常識な根元(方針転換)を浅はかに想定してしまうような各種の短気から出た言葉に耳を傾けることのないように。帝国にとって好都合なことは、朔日に〔皇子ダーニヤールを宮殿の〕柱廊の間(pesh-khāna)に連れてくることだ。そして、その月の8日に立出せよ、と。私奴は至聖のお方(皇帝)に申し上げました。羊は犠牲(qurbāni)に役立ちますし、あるいはピラフ料理(biryāni)その他どんなご用にも役立ちます、と。確かに、陛下が如上のようにおっしゃれば、私にはそれに対してどんな言い訳があるというのでしょうか」。

要するに、ヒジュラ暦1007年(1598年7月25日－1599年7月13日)、アブル・ファズルは皇子ムラードを連れ出してくる命令を受けた。さらに、デカン遠征の将軍たちがその地を防衛する責任を引き受けるならば、ムラードとともに帰還すること、さもなくば皇子をアクバルのもとに送り届け、自分自身はデカンに引き続き止まること、皇子と仲違いしないこと、またミルザー・シャー・ルフ(Mirzā Shāh Rukh)⁽²⁸⁾の配下にあった者たち全員を監督し、シャー・ルフにも旗幟(‘alam)と触れ太鼓(naqqāra)を与え、彼の領地(jāgir)であったマールワ地方から退去させ、兵士たちの軍糧をその地方から調達するようにするとともに、デカン地方に災禍が生ずれば直ちに急行すること、との命令を受けた。アブル・ファズルはプルハーンプルの近くに到着した。ハーンデーシュ王国の支配者バハードゥル・ハーン(Bahādur Khān)はアーシール城(Āsir kā qil’a)⁽²⁹⁾から下りてきて4印里(1印里kosは約3.6キロメートル)離れたところまで歓迎に出向いてきた。彼は鄭重を極めた礼儀作法で〔アクバルの〕勅令と恩賜の長衣(khil’at)⁽³⁰⁾を受け取り、恭順の跪拜(sujūd-e ‘ajz)を行った⁽³¹⁾。彼は一行を引き止めようと望んだが、アブル・ファズルたちの方はそこに止まらなかった。彼ら

は騎乗し、ブルハーンプルで下馬した。バハードウル・ハーンはそこにもやってきた。アブル・ファズルは非常に辛辣でかつ効果の期待できることを伝えて、彼に得策の道を示してやった。すなわち、「[我々のアフマドナガル] 出撃に参加なされよ」と。バハードウル・ハーンはこの実に容易な事柄に対し、あれこれと言い逃れを申し出たが、自分の息子カビール・ハーン(Kabir Khān)に2000の軍隊を与えて派遣することを承認した。アブル・ファズルは彼らをもてなすために自軍の駐屯地に連れて行こうと思い、次のように言った。「貴殿が同行していただければ、我々も進発します」。バハードウル・ハーンは多大の贈り物を申し出た。アブル・ファズルは前もって事情を教えてもらってはいなかった。このため、彼は[贈り物にびっくりして] 正気を失った、というようなおしゃべり好きの口にしたうわさが飛び交った。彼は[再び]アーシールに向かって進んで行った。バハードウル・ハーンも同行した。彼はアブル・ファズルに盛んに愛想のよい言葉をかけていた。彼の叔父のフダーワンド・ハーン(Khudāwand Khān)にアブル・ファズルの姉が嫁していた。このためバハードウル・ハーンには好都合であった。しかも彼の父ラージー・アリーハーン(Rājī ‘Alikhān)はアクバルの宮廷に対して全面的な友好と誠意を示していた。そのために[一族の] スハイル・ハーン(Suhail Khān)はデカン遠征でハーニ・ハナーン(Khān-i Khānān)⁽³²⁾と行動を共にし、見事な男らしさを発揮して戦場で戦死した。

(474)アブル・ファズルは次のように書き記している。多くの将官たちにとっては、私の管轄下にあるこのデカン遠征事業に任命されることは耐え難いことであった。彼らは一致して蝶子(pech)を打ち込んだ。その結果、彼らの瞞着によってずっと以前からの同志たちは私から離反していった。そこで止むなく新軍を編成した。幸運にも多くの兵士たちが集まってきた。悪意を抱く者たちは非難の網を広げ私に次のように言った。「何をやっているのか。これは間違っているよ」。私は断念しなかった。彼らは騒動の起こることを期待して、事態の推移を見守っていた。私は皇子(ムラード)の軍営地から30印里(約110キロメートル)離れたところに到着すると、そこに緊急の使者としてミルザー・ユースフ・ハーン(Mirzā Yūsuf Khān)⁽³³⁾

たちが皇子の軍隊からの書簡を携えてやってきて、皇子が奇病に襲われていることを伝えた。「騎乗してこちらに来られたし。恐らく医者を変えることによって、何がしか効果が期待されよう。そして精神的、肉体的破滅からは免れよう」と。宮廷の大官たちには落胆させられていたし、また皇子に同行することも禁じられてはいたが、しかし私はすべてを悪魔の誘惑と判断し、迅速な行動を取った。心配していたことは、すべて次のことにかかっていた。つまり、皇子の人生が神の慈愛につつまれて終焉を迎えるように、そしてまた言葉で明示された幸運を〔デカン遠征という〕事業の遂行によって確かなものとするように、ということであった。デオオルガーオン(Deolgāon)⁽³⁴⁾から速度を一層速めて進んだ。夕方になって予定地に到着したが、そこにはかの人影はなかった。〔目下の〕事業は、治療することに取り変わっていたのだ。その辺りは無秩序な群集の人ばかり。司揮官たちの意見は、皇子をシャープール(Shāhpūr)⁽³⁵⁾まで連れて行き、それからまた前進しようというものであった。私は次のように言った。「この世において人々は大小の挫折に心を挫かれている。驚くべき騒乱が起ころうとしている。掠奪者たちが近辺にいる。それでもなお前進を語るの、災厄の餌食となることである」。協議をしているうちに、この花束〔皇子〕の狼狽は一層増していった。病態は悪化し、皇子の生命は神に召された⁽³⁶⁾。ある者たちは邪心から〔皇子一行の〕荷物を引き受けるために、また別のものたちは皇孫たちを護衛するために別れて行った。神の助けをえて、この騒ぎの最中でも私は心を乱すことはなかった。為したいことは、この騒ぎが落着いた後に置かれた。遺体は妃たちと一緒にシャープールへ送り出し、この旅人(ムラード)の遺体はその地の墓に埋葬した。一部の人々は先の軍営地から抜け出して謀反を起こしはじめた。訓戒が多いところほど驕慢は激しかった。この間に、殿軍に控えていた私の軍隊が到着した。この軍隊は3000以上の陣容であった。今や私の話すことが一層光彩を放つようになった。〔私の命令に対して〕片意地を張っていた者たちも進発し、褒賞を求めて戦闘についた。彼らは道理ある言葉に耳を傾けはじめた。兵卒から将校に至るまで誰もが再度前進しようとの考えを持つに至った。ムヌイム・ハーン(Mun'im Khān)の死⁽³⁷⁾、ベンガル地方の反乱⁽³⁸⁾、シハーブッ

ディーン・アフマド・ハーン(Shihāb al-Dīn Aḥmad Khān グジャラート総督)のグジャラートからの来援、この国(アフマドナガル王国)の内紛のことなど、様々の事柄を彼らに話してやった。私の注意は、とりわけムガル宮廷に向けられていた。皇帝の幸運が放つ光によって、私の目は輝いた。このため世間が良しとすることでも、私は不機嫌になっていた。多くの善と悪とが区分けされた。私は真実の支援者(神)に向かって心顔を開いた。そして前進のことを心に描いた。デカン征服のために軍旗は進められた。この進軍によって、兵士たちの胸に一層(475)力がみなぎった。前もって国境地帯の人々に対して感謝の気持ちを伝えておいた。こうした人々およびこの国の番兵たちに訓戒の手紙を送った。それらは窮乏者たちの手によって阻止された。皇子の財庫のなかの皇帝のもとに送るに値しないものや、自分が保管していたもの、借用の都合をつけたものは、すべて施し物(nichhāwar)にした。しばらくして、先に進発していた人々が引き返してきた。そして戦闘は激しくなった。その一方で、皇子の統治下にあったすべての地方の治安は改善された。

しかしながらナーシク(Nasik)⁽³⁹⁾へ至る道は治安が悪化し、[ここを通る迂回路は] 通行期間が長期化した。知らせは遅く届いたり、滞留したりした。なぜならば皇子死去の知らせがこの地(ナーシク)に届いたときは、その知らせを受け取る兵站将校(kār-pardāz)はアフマドナガル王国の息のかかった者であったからである。絶望によって軍隊はバラバラになった。私が送り出した軍隊は士気が高くなかった。アフマドナガル王国を引き上げた軍隊は、私のところにまで帰還することができず、かなりしばしば駐屯地の周辺地域に留まることが多かった。[アクバルの幸運が及んできて、この出来事を予告(pesh-gu'ī)していたかのような。彼が前もってアブル・ファズルを送り込んだのは、もしアブル・ファズルが到着しないうちに皇子(ムラード)が死去したならば、全軍が瓦解することとなったであろうからである。あちこちの地方では不名誉なことが起こったことであろう。そしてやがて数年のうちに帝国が持ちこたえることのできないような諸々の困難が発生したことであろう]。ムガル朝宮廷の同僚たちは私の願い出を[皇帝に] 取り継ぐことをせず、あのような出来事[皇子の死去]を間違っ

た考えに基づいて隠していた。もし皇帝に事態が明瞭に伝えられていたならば、軍隊と財庫をたちどころに発送されていたことであろう。そうなれば、私は宮廷に絶えず上奏し続けたことであろう。そして世界主〔アクバル〕の関心は日毎に増したことであろう。軍隊の実情は、当代の主(ahl-e zamāna)の意見さえも受け止めることができなくなっていた。遠近の人々は呆然としていた。神の全能は可能性が有する力能を通して具現する⁽⁴⁰⁾。無能な私奴に、一体何ができるというのか。対句(bait)。

私は頑なにかの方(皇子)の事業を続けるに非ず

称賛はあの方にふさわしいと人は言えども

宮廷の非難や当てこすりをする人々を、沈黙と後悔が押さえ込んでしまった。悪企みの嵐はなお打ち続き、皇帝はアブル・ファズルを宮廷から遠ざけたのだ〔との陰口が叩かれた〕。だが真の創造者(神)は、このこと(デカン派遣)をもって彼が名声を博するための元手にしてやったのである。そして彼を不朽の感化の館(nadāmat-khāna)に座らせてやったのだ。詰まるところ、彼は遠征事業に忙殺されたのであった。彼はスンドル・ダース(Sundar Dās)⁽⁴¹⁾に軍隊を与えてトゥルトウム(Tultum)⁽⁴²⁾の城に派遣した。彼は業務によく通じ、この国にすむ何人かの者たちを招喚した。彼らのなかの一人は、城に入って城守を連れ出してきた。多少の悶着の後、城は陥落した。

スーイード・ベーク(Su'īd Beg)と私(アブル・ファズル)の息子(アブドゥルラフマーン)は訓戒所(adab-khāna-e zindān)に入っていた。数日後、彼らもデガン遠征に任命されて、ダウラターバードへ派遣された。ダウラターバード城内の者たちは次のように書き送ってきた。「もし厳格な約束によって我々の財産に妨害を受けないものと安心できるならば、城の鍵を与えよう」。約束の準備ができ上がった。いくらかの黒人(アビッシニア人)およびデカン人の不満分子が相手側のなかにいた。息子のアブドゥルラフマーンに自分の配下の1500の騎兵およびそれと同数の皇軍(bādshāhī fauj)を率いさせて、彼らの鎮定に向わせた。皇子の死去によって騒ぎが大きくなっていったとき、私はミルザー・シャー・ルフを何度も呼び寄せようとした。(476)人々はそうした騒ぎのときには、無数の根も葉

もないうわさ話を飛び交わすものである。そのために、人々は誰も知らないあれこれの事柄に思いを駆けて動いた。私がミルザー・シャー・ルフに期待していたのは、皇帝の勅令が届かないうちに、彼も万が一の際に冷静さを失って自分自身を押し出してしまうようなことをしない⁽⁴³⁾ことであつたが、彼は人々のうわさのなかに入ってしまった。叱責を混えた勅令がこれに引き続いて届き、そしてついに皇帝がフサイン・サザーワル(Husain Sazāwal)を派遣してきたとき〔ミルザー・シャー・ルフは〕止むなく進發した。また一方〔フサイン・サザーワルの〕軍隊は首尾よく到着して〔我が軍と〕合流した。私は〔彼を〕歓迎して軍営地に連れてきた。このような男らしく敬虔な人物が到着したことで、私の心は晴れやかとなった。

古老の將軍シェール・ホージャ(Sher Khwāja)は皇子ムラードに同行し、その一部隊の指揮官となっていた。そして国境の郡都ビール(Bīr)⁽⁴⁴⁾の防衛に当たっていた。雨期が到来した。デカン人たちが軍隊を集結しはじめ、精選された5000騎のアビッシニア兵およびデカン兵、並びに60隻の狂暴な軍象を率いて襲来しようとしている、との知らせが届いた。シェール・ホージャのもとには僅か3000の軍隊がいるだけであつた。彼は自ら攻撃に打って出て、ビールの町から数印里前進し敵に襲いかかった。しかしながら劣勢の軍隊故に、戦闘を続けながら後退し、〔ビールの〕城門を閉鎖して籠城した。シェール・ホージャは負傷していた。だが彼が敵に打撃を加えたとのうわさが広まってきた。彼は当方に書簡を送ってきた。私(アブル・ファズル)は増援軍を送ることにした。彼の書簡が届くと適当な部隊が集結した。私は誰とも相談しなかった。どしゃ降りの雨が降っていた。こうしたなかで、私はただ1人で派遣軍を率いた。軍隊の管理はミルザー・シャー・ルフに任せた。シャイフ・アブトゥルラフマーン〔自分の息子〕をダウラターバードから呼び戻した。そして、「ガング川⁽⁴⁵⁾のほとりへ行って軍を集結せよ。汝が行く所、いずこにも見張りが立って巡回している。前線では任務の遂行に絶えず努め、後方では英気を蓄えよ」と伝えた。皇軍の指揮官たちのなかには、覇気のある者は誰も見当たらなかった。ミルザー・ユースフ・ハーンは20印里離れたところにいた。私は単独で彼のところに向かった。そして夜になって到着し、彼にも支援を応諾さ

せた。こうして各地の軍隊を糾合して連隊を組み、全軍威儀を正して進發した。ゴダーヴァリー川の上流のガング川は増水していた。幸運にも急に水位が下がった。そして軍隊は徒歩で渡って行った。敵軍は川のほとりで寝ていた。彼らは〔我が方の〕前衛部隊の急襲を受けて飛散した。翌日、敵軍はビール城の包囲も解いてしまった。ムガル朝宮廷では謝恩の催しが執り行われた。そして慶祝の衆会が開かれた。ガング川のほとりには〔ムガル軍の〕陣営が敷かれ、アフマドナガル王国の威厳は消沈した。アクバルは現任の將校たちではデガン遠征が支えきれないことを知ると、皇子ダーニヤールに軍隊を与えて送り出した。そしてハーニ・ハーナーンに皇子後見人(atāliq)の地位を与えた。

〔アブル・ファズルは以下のように述べている〕。この日〔皇帝は〕上の皇子〔サリーム、即ち後のジャハーンギール〕にアジュメール州を与え、その統治者(rānā)としての重大な任務を委ねた。皇帝は彼に大きな愛情を抱いていた。そして絶えず愛情は深まっていた。だがこの皇子は飲酒を友としており、善惡の区別がつかなかった。しばらくの間、皇帝は謁見の許可を与えなかった。結局、皇太妃マリヤム・マカーニー (Mariyam Makāni)の執り成しで、彼は平身低頭礼の幸運を得た。そして〔アジュメールへの〕街道に向かい、任務に着きますと再度約束した。皇帝は自らマールワ地方(アジュメール州東隣の州)にやってきて、狩りを始めた。その結果、(477)あらゆる方面で勇気づけがなされた。皇帝はハーニ・ハーナーンを皇子ダーニヤールの支援のために派遣した。そしてハーニ・ハーナーンが到着すれば、アブル・ファズルは宮廷に向かうようにとの命令を下した。私(アブル・ファズル)は大變嬉しくなった。この間に私はバイターラ(Baitāla)城⁽⁴⁶⁾を制圧した。

アクバルのもとに、サリームが〔アジュメール赴任の〕途中で滞留しているとの知らせが届いた。皇帝はミール・アブドゥルハッイ (Mir ‘Abd al-Ḥayy)とミール・アドル (Mir ‘Adl)に諭し、重責を負わせて送り出した。私はアフマドナガルをめざして進發した。チャーンド・ビービー (Chānd Bibi)⁽⁴⁷⁾はブルハーヌル・ムルクの妹で、彼の孫息子〔バハードゥル〕を祖父の後継者に即けて戦闘準備の体制を取った。アーバング・ハー

ン(Ābhang Khān またĀhang Khānともいう、アフマドナガル王国のアッピシニア系武将)は騒動を引き起こす多数のアビッシニア人たちのために、かの子供(バハードウル)を国王として承認していた。しかし彼はチャンド・ビービーの命も狙っていた。この貴婦人はムガル朝大官たちに歓迎のメッセージを送ってきた。またデガン人たちに対しても友好を口にしていた。私に対しても、彼女はこうした方策を取りはじめていた。私は次のように返答した。「もしも先見の明と吉祥とをムガル朝宮廷に懸けようというのであれば、それに越したことはない。誓約がなされるならば、私は務めを引き受けよう。さもなくば、招請に応じたとして一体どんな利益と展望の道が開けるというのか」。彼女は当方の好意を理解して、友好的関係を強めた。そして真の誓言を自筆で認めた誓約書を送ってきた。それには次のように書かれていた。「貴殿がアーバング・ハーンを屈服させて下さった場合、〔アフマドナガルの〕城門の鍵を引き渡ししましょう。しかしダウラターバードは私の領地(jāgīr)に含まれていますので、数日のうちにそこへ行って滞在することができます。ご所望なら、この王宮(ダウラターバード)にお越しになることができます。バハードウル(Bahādur Nizām Shāh アフマドナガル第9代国王、在位1596-1603)をこの王宮に出向かせます」。これに対しては、残念ながら私の随行者たちは警戒してなかなか実行に移せそうにならなかった。

シャーガル(Shāhgarh またShāhgaḥとも)⁽⁴⁸⁾では軍隊が遅くまで横になって休んでいた。皇子(ダーニヤール)の到着の知らせは立ち消えになっていた。アーバング・ハーンの悪企みが燃え盛った。彼はシャムシール・ムルク(Shamshir al-Mulk)⁽⁴⁹⁾〔ベラル王国の支配は彼の一族に属していた〕を獄舎から連れ出し、軍隊を率い、ダウラターバードを経由してベラル地方へと向かった。ベラル地方にはムガル軍の輜重部隊並びに女・子供たちが留まっており、こうした人々は動転することになるだろうし、ムガル軍のなかに分裂が生ずることになるかもしれない。私は前もってこのことを知っていたので、ミルザー・ユースフ・ハーンたちに軍隊を与え、ベラル地方に派遣し了えていた。だが彼らは油断の甘美な眠りを貪っていた。アーバング・ハーンがベラル地方に入ってきた。そして不

安を引き起こした。多くの番兵たちは敗走した。〔家族たちへの〕愛情のゆえに、〔シャムシールル・ムルクに対する〕人々の同情は霧散した。私はベラール地方へ軍隊を増派した。そして私自身はアフマドナガルをめざして進発した。外部から来入した悪玉どもの首根っこを押えつけ、チャーン・ビービーが言ったことの真偽を確かめるためである。私たちが1日分の旅程(manzil)を進んだとき、敵対者たちはアフマドナガルを守るために全方面から集結し、この都城へと向かっていった。しかしながらアクバル帝の幸運が、シャムシールル・ムルクが死亡したとの知らせを運んできてくれた。ユースフ・ハーンも覚醒して戦形を展開した。彼は数人の指揮官たちに前進を命じた。彼らは一刻も休まずに突撃しながら前進した。夜になって、さる所を占領した。尋常ならぬ歓声が上がった。このとき、シャムシールル・ムルクが打倒されて戦勝の祝賀が催されたのだ。

遠征は勝利に向かっていった。遠征隊はガング川沿岸のミンゲーパッタン(Minge-paṭṭan)⁽⁵⁰⁾に駐屯した。皇子からの(478)命令が相継いで届いた。その内容は、汝の苦労は遠近いずれの人々にもその心に深く刻まれている。余は余の面前でアフマドナガルの勝利がえられることを望んでいる。汝ははやる気持ちを押し止めよ。今や余は遅からず進発せんとしている、というものであった。ここにおいて、軍隊に新たな騒ぎが起こった。皇子がブルハーンブルに到着すると、バハードゥル・ハーンはアーシール城から出迎えをしなかった。皇子はこの自惚者の首を放擲するよう要求した。ミルザー・ユースフ・ハーンはアフマドナガルへ向けて出撃していたが、さらに前進することを望んでいた。私は彼を呼び戻した。これを見て他の者たちもまた方向転換した。多くの指揮官たちも許可なくして取り急ぎ〔別方向に〕進発した。内心震え上っていた〔アフマドナガル王国の〕敵どもは、この状態を見て勇気づけられた。彼らは何度か夜襲をかけてきた。〔我が方の〕勇猛者たちは果敢に戦い、白兵戦を戦い抜いた。神の加護並びに相継ぐ勝利によって、敵は散り散りになった。アーバング・ハーンは〔我が方に〕歓迎と謙遜を示しはじめた。(未完)

おわりに

以上が「アブル・ファズル、アクバル宮廷へ出仕」の部分の全訳である。アーザードのアブル・ファズル伝は、これに続けてアクバルのデカン親征、アーシール城制圧、アブル・ファズルの宗教観、彼の著作と書簡、人となりといった核心部に入っていく。これらについては続稿において紹介することにした。

本稿で紹介した『アクバル宮廷』の記述によって、アーザードが依拠した文献として明白なものは、アブル・ファズルの『アクバル・ナーマ』と前稿で指摘した『アクバル会典』の自叙、それにバダーウニーの『諸史精選』である。とりわけ『アクバル・ナーマ』に夥しく拠っているように見受けられる。まだすべてを確認したわけではないが、アーザードが「アブル・ファズルは以下のように述べている」あるいは「次のように記している」と前置きして、アブル・ファズルを一人称で表記しているところは、ほぼ『アクバル・ナーマ』に拠っていると考えてまず間違いないであろう。この点は、続稿を紹介することによって一層ははっきりするものと考えている。

注

- (1) Abū al-Laith Ṣiddiqī, *Āj kā Urdū Adab*, Lāhor, 1970. アブ・ル・ライス・スイッディーキー (加賀谷寛編訳)『近代ウルドゥ文字史研究』東海大学出版会、1979年。
- (2) 同書、53-56ページおよび261-265ページ。
- (3) それらは以下の通りである。松村耕光「パンジャープ協会に於けるウルドゥー詩刷新の試み(I)」『大阪外国語大学論集』第1号、1989年、167-188ページ。同「パンジャープ協会に於けるウルドゥー詩刷新の試み(II)」『大阪外国語大学論集』第3号、1990年、103-127ページ。同「パンジャープ協会に於けるウルドゥー詩刷新の試み(III)」『大阪外国語大学論集』第4号、1990年、161-197ページ。同「パンジャープ協会に於けるウルドゥー詩刷新の試み(IV)」『大阪外国語大学論集』第6号、1991年、161-178ページ。同「パンジャープ協会に於けるウルドゥー詩刷新の試み(V)」『大阪外国語大学論集』第7号、

- 1992年、103-123ページ。同「『生命の水』序論に見られるアーザードのウルドゥー語・ウルドゥー詩改革論」『大阪外国語大学論集』第33号、2005年、13-26ページ。同「『生命の水』におけるウルドゥー古典詩の時期区分について」『大阪大学世界言語研究センター論集』第1号、2009年、49-62ページ。
- (4) 「パンジャーブ協会に於けるウルドゥー詩刷新の試み(Ⅱ)」104ページ。
- (5) Muḥammad Ikram Chughtā'i, *Muḥammad Ḥusain Āzād : Na'e daryāft-shuda mākhaḡ kī roshnī men*, Lāhor, 2004, p.19.
- (6) 「『生命の水』序論に見られるアーザードのウルドゥー語・ウルドゥー詩改革論」21ページ注(3)。その編者、書名等は、Āghā Muḥammad Bāqir (ed.), *Maqālāt-e Maulānā Muḥammad Ḥusain Āzād*, 3 vols., Lāhor, 1966, 1978, 1987.
- (7) 同論文、15-16ページ。
- (8) Sh. Inayatullah, "Āzād, Muḥammad Ḥusayn," *Encyclopaedia of Islam*, new edition, Vol. I, pp. 807-808.
- (9) 1947年版573ページでは、「彼らは狭い考え方を持ち」以下「彼らの強欲は先祖依頼のものであって」までが削除されている。
- (10) 前稿あとがきで触れたように、アーザードはアブル・ファズルになり移ったかの如く一人称の代名詞で彼を表示していることが本文中少なくない。本稿では、前稿のようにそれらの代名詞を一いち改めることはせず、そのまま訳している場合が少なくない。
- (11) クルアーン第2章(雌牛章)の第255節をさす。神学上重要な一節とされる。
- (12) イスラーム神秘主義者スーフィーの修道場、庵。またkhānqāhとも発音。
- (13) ここの文意は明解ではないが、アブル・ファズルは夜明けになると信仰心を募らせて、自分の内なる敬神のランプに点灯したということを述べているのであろうか。なおアクバル時代の宮廷では、正午にスーラジ・クラント(sūraj-krānt)と呼ばれる白く光る石(水晶か)を用い太陽光を綿花に引火させて採取し、この種火を保存して灯明に使用する儀礼慣習のあったことが『アクバル会典』『灯明点火』の条に記されている。*Āīn-i Akbarī*, text, ed. by H. Blochmann, Vol. I, Calcutta, 1872, p. 44, English tr., by H. Blochmann, Vol. I, Calcutta, 1873, p. 48.
- (14) この詩と非常によく似た四行詩が^aAbd al-Qādir Bada'ūnī, *Muntakhab al-Tawārīkh*, ed. by W. N. Lees and Ahmad Ali, Vol. II, Calcutta, 1865, p. 199にある。バダーウニーのこの『諸史精選』(以下この書をこのように略記)では第2行目のみ「かのニムロデ(Namrūd)に蛎のような象を贈り賜え」となっ

ていてやや異なるが、あとの3行は全く同じである。バダーウニーは、アブル・ファズルがよく口にしていた四行詩としてこれを引いている。ニムロデは『旧約聖書』創世記第10章8-11節およびミカ書第5章6節に登場する地上最初の権力者。彼は、鼻からもぐり込んで脳に達した蝨によって殺された。cf. English tr., Vol. II, by W. H. Lowe, Calcutta, 1884, p. 202 & n. 3.

- (15) この四行詩もバダーウニーの『諸史精選』第2巻に収められている。*Ibid.*, Vol. II, pp. 199-200; English tr., Vol. II, p. 202. なお、『アクバル宮廷』第6版では「そして我が手」(wa dast-e man)が「我が友」(düst-e man)と誤記されている。
- (16) ムジュタヒドはかつてのユダヤ教指導者ラビと同様に、初期の時代にあつては生業を営む者が多かったといわれる。*Muntakhab al-Tawārīkh*, English tr., Vol. II, p. 203, n. 1.
- (17) ペルシアのシーラーズ生まれの詩人ジャマールッディーン・ムハンマド・シーディー (Jamāl al-Dīn Muḥammad Sīdī 1555-91)。通称はウルフィー・シーラーズ (‘Urfī Shīrāzī)。ウルフィーは号。ムガル朝の文人優遇にあこがれて1584年渡印。ファテプル・シークリーでファイジの歓迎を受けた。とりわけ重臣ミールザー・アブドゥルラヒーム (Mirzā ‘Abd al-Rahīm 注32参照)の保護を受けた。*Encyclopaedia of Islam*, new edition, Vol. X, p. 892.
- (18) 『アクバル・ナーマ』をさす。『イクバル・ナーマ』はジャハーンギール時代に成った3巻本の歴史書として実在するが、ここではそれを意味してはいない。
- (19) アブル・ファズルの母が実際に他界したのは、1590年1月15日ラホールにおいてのことであった。ヒジュラ暦997年とするのはアーザードの思い違いである。
- (20) 三つの対句からなるこの詩は、『アクバル・ナーマ』にそのまま収められている。Shaikh Abu’l-Fazl, *Akbar-nāma*, ed. by Agha Ahmad Ali and M. Abdur Rahim, 3 vols., Calcutta, 1877-1886, Vol. III, p. 573, English tr., by H. Beveridge, 3 vols., Calcutta, 1902-1939, reprint, Delhi, 1972-1973, Vol. III, p. 867.
- (21) ここの文章は、アーザードが『アクバル・ナーマ』のペルシア語テキスト Vol. III, p. 573にある相当する原文を下敷きにして書いたものである。『アクバル・ナーマ』の英訳者ベヴァリッジは、ここに訳出したアーザードの解釈が正鵠を射たものであるとして、それを紹介している。Beveridge, *ibid.*, p.

868, n. 1.

- (22) アブル・ファズルの孫。ヒジュラ暦999年ズール・カーダ月3日(1591年8月13日)生まれ。シャーージャハーンの治世第15年に官位五百位で死去。
- (23) 金曜礼拝やイード祭の礼拝では、モスクの説教師が行う説教において、時の統治者のための祈りも行なわれる。
- (24) テキストではrajūrīと読める。語末のīは不特定を示す語尾と解したが、rajūrの意は明瞭ではない。あるいはrajwārīと読んで、ヒンディー語rajwārā+īの転訛と解することができるかもしれない。この場合は「さるヒンドゥー王国」の意となる。
- (25) インダス川上流のカシュミール地方西部に勢力を張っていたアフガン系の部族。
- (26) トランスオクシアナ地方に勢力をもったシャイバーン朝の王。バダフシャーンを併合しカーブルにも進出しようとしたので、アクバルは警戒したが、1598年2月に死去。
- (27) アクバルが浴室に入っている時にアブル・ファズルに呼びかけた言葉がQibla-e Abu'l-Fazl!とメッカの方向を意味する語で始まっていたので、「幸先のよい言葉」(zabān-e mubārak)といっているのである。
- (28) 中央アジアのシャイバーン朝の王族出身者。1583年に同朝のハーン位に即いたアブドゥッラーによって追放され、アクバルのもとに庇護を求めた。その結果、1593年以後中央インドのマールワ地方で皇子ダーニヤールの率いるデガン遠征軍を増援する任務を与えられた。さらに1599年8月にはムガル朝のアフマドナガル攻略軍にも加わった。
- (29) またアーシールガル(Āsirgarh)とも呼ばれる。ハーンデーシュ王国の都ブルハンプルから、北北東約20キロメートル離れたところの山上にある防禦用の出城である。インド平原部とデカン地方を結ぶ大幹線道を扼するところに位置し、インド中難攻不落随一の城塞といわれた。バハードゥル・ハーンはこの王国を支配したファールーキー(Fārūqī)朝最後の王(在位1597-1601)。
- (30) 恩賜の長衣は、権力者が自分への恭順を示す各地の首長や臣下たちに所定の作法に従って与えたガウン類。これによって支配と臣従の関係が儀礼的に確認される。宮廷において皇帝が直接与える場合が多い。
- (31) ハーンデーシュのバハードゥル・ハーンがアクバルの勅令を受け取るために、自分の居城から約15キロメートル出迎いて跪拝の礼によって拝領した

ことを示すこの文章は、勅令授受の方式をよく踏まえた叙述である。ここでは、アブル・ファズルが勅令伝達者の役割を果たしていた。近藤治『ムガル朝インド史の研究』京都大学学術出版会、2003年、345-346ページ参照。

- (32) ミルザー・アブドゥルラヒーム・ハーン(Mirzā ‘Abd al-Rahīm Khān 1556-1627)。ハーニ・ハーン(大ハーン)は彼の称号。アクバルの摂政を勤めたバイラム・ハーンの息子。4歳のとき父が暗殺されると、アクバルのもとで養育された。デカン遠征事業に長くかかわっていた。ジャハーンギール時代も重臣。『バーブル・ナーマ』のペルシア語版編集の責任者で、自身も詩文をよくした。
- (33) ムガル朝の支配下に入ったカシュミール地方の知事を1590年代初に務めた。その後これを辞任し、デカン地方に派遣されていた。
- (34) ベラル地方西北部の町。ブルハーンプルからハイダラーバードに至る幹線道路上に位置する。
- (35) デーオルガーオンの東方約70キロメートルにある町。
- (36) ムラードは1599年5月12日、デーオルガーオン南南西約50キロメートルのテンブルミー (Tembhūrmi)において、アルコール中毒による振顫譫妄症^{しんせんせんもう}によって死亡した。この地は、アフマドナガル王国との国境に程近いベラル地方西部に位置する。
- (37) フマーユーン時代以来のムガル朝重臣。ベンガル地方赴任中、罹病して1575年10月に死亡した。
- (38) ベンガル地方のアフガン族が中心になって1580年1月に起こした反ムガル朝の反乱。これに呼応してカーブルにいたアクバルの異母弟ムハンマド・ハキームも反旗を翻えしたが、翌年に鎮圧された。
- (39) アフマドナガル王国の北西部、ゴードーヴァリー川上流に沿って位置する、ラーマ伝説にまつわる宗教都市。当時、ムガル朝支配下のグジャラート地方との連絡ルートはこの町を通っていたようである。
- (40) 原文はKhudā kī qudrat imkān kī ṭāqat sē bāhir hai. アブル・ファズルの神学的思想の確信の一端に触れる文章と解される。
- (41) グワーリアル出身のバラモンで、「偉大な詩人王」(mahā kavi rāi)の称号を持つ詩人でもあった。
- (42) テキストはこう読めるように表記しているが、地名としてはタルトゥーム(Taltūm)の方が一層一般的に使われているようである。ここはデーオルガーオンの西方約55キロメートルに位置し、ハーンデーシュ、アフマド

ナガルのいずれの国境にも近い。町の近くにブルハーンプルとアウランガーバードを結ぶ幹線道上の峠があり、アジャンターも遠くない。cf. Irfan Habib, *An Atlas of the Mughal Empire*, Delhi, 1982, 9A, 9B, 14A, 14B.

- (43) 原文は…be-qarār ho-kar apnē ta'in pahunchāte…となっているが、これでは全文の意が通じないので、ここではpahunchāteの前に否定辞naを補って訳している。
- (44) アフマドナガルの東部に位置し、ベラルール地方に隣接するビール県ビール郡の中心地。
- (45) ビール県の北境を東流するガングガウタミー (Gang-Gautamī)川、すなわちゴードーヴァリー川をさす。ダウラターバードはこの川の北側、西北西の方角に位置する。テキストではKangとなっているが、Gangと読むのがよい。
- (46) テキストの方はタバーラ (Tabāla) と読めるような表記となっているが、これはバイターラの誤記であろう。この町はBaithālvāḍīあるいはBaitālabarīと表記されることもある。ベラルール地方最西部、アフマドナガル王国との国境地帯の県城所在地で、タルトゥームの町に程近い。
- (47) アフマドナガル王国ニザーム・シャーヒー朝第3代国王フサイン・ニザーム・シャーの女。政略結婚によってアーディル・シャーヒー朝第5代国王アリー・アーディル・シャーに嫁したが、1580年に夫が死去すると、まもなく故国に帰り、その政治に深く関与した。1596年、ベラルール地方のムガル朝への譲渡を承認。1603年、自軍によって殺害された。
- (48) ビールの北方、ゴードーヴァリー川北岸に位置する町。この町からアフマドナガルまで直線で100キロメートル余、ダウラターバードまで80キロメートル余で、三つの町を結ぶ直線はほぼ正三角形に近い形をとる。
- (49) 1490年に創建されたイマード・シャーヒー (ʿImād Shāhi)朝のベラルール王国は、第5代国王トゥフファール・ハーン (Tufār Khān)のときアフマドナガル王国に併合され(1574年)、トゥフファール・ハーンの王位は剥奪された。この時以来、彼の息子シャムシールル・ムルクはアフマドナガルの獄舎に繋がれていた。
- (50) パッタンはパイタン (Paīṭhan)と同じく「都市」を意味する。ゴードーヴァリー川中流沿岸のパイタンないしパッタンといえは、古代のサータヴァーハナ朝の都プラティシュターナ (Pratiṣṭhāna)を指すのが通例である。ムガル朝時代、この町を中心にしてゴードーヴァリー川中流北岸一体にパイタン県が置かれた。ミンゲーパッタンは「パッタン本町」の意であろうか。